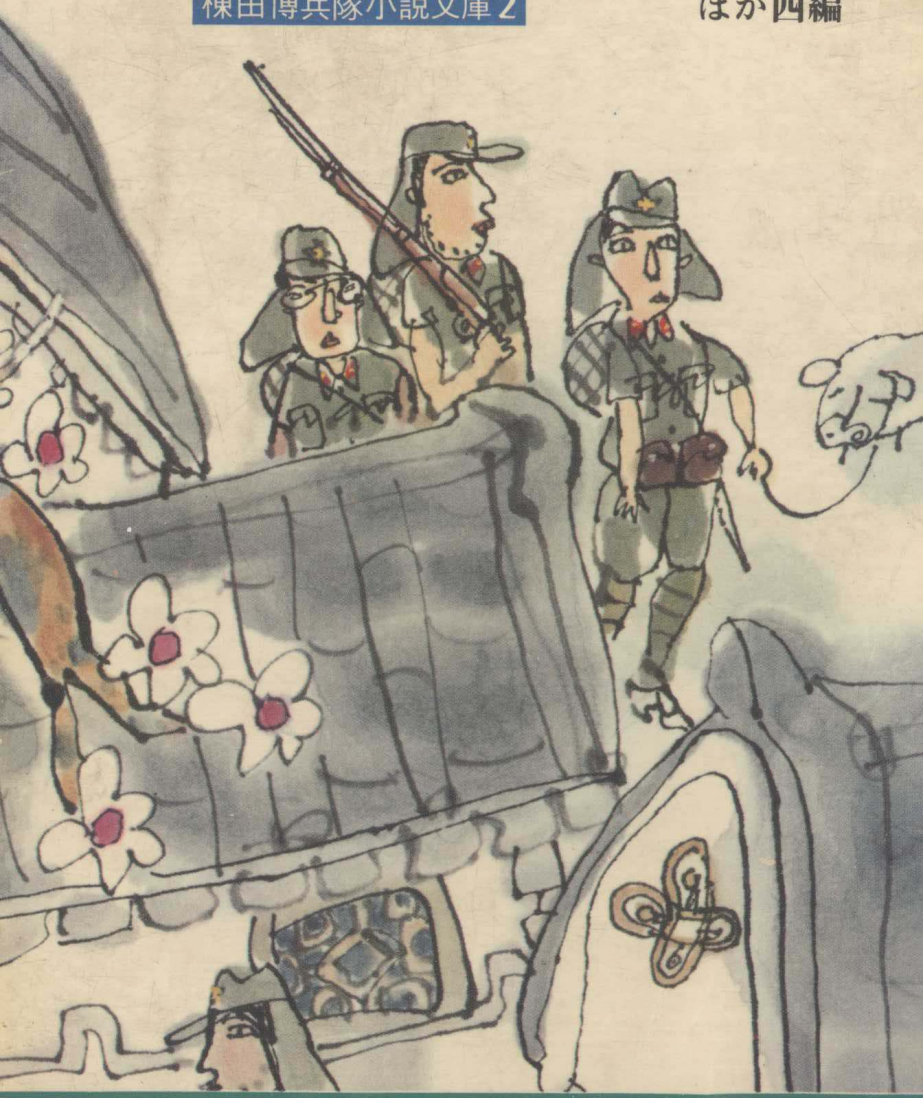
続 分隊長の手記

棟田博兵隊小説文庫 2

ほか四編

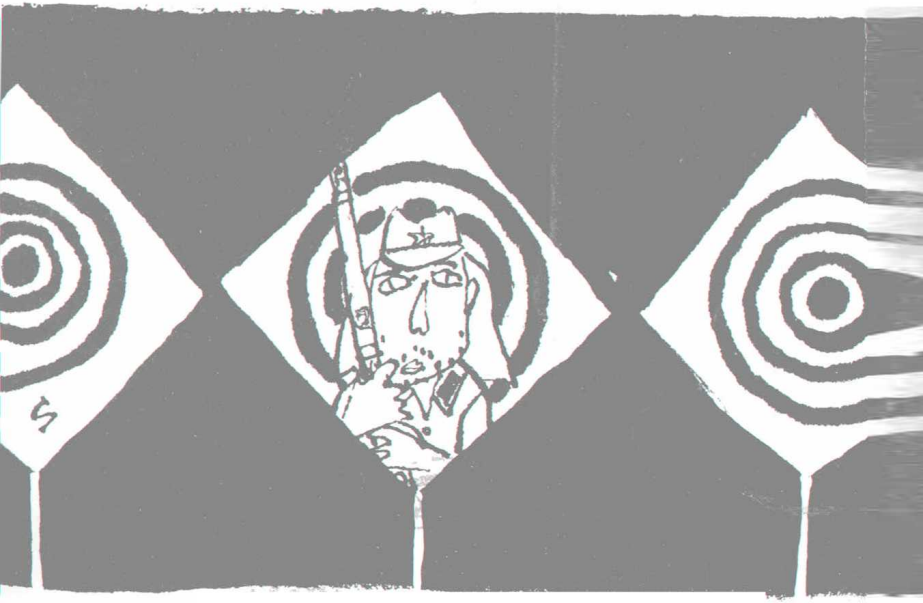


棟田博兵隊小説文庫 2

兵隊小説文庫 2

続 分隊長の手記

ほか四編



光人社版

棟田博兵隊小説文庫 2

著者　棟田博

昭和四十九年十二月三日　印刷
昭和四十九年十二月二十日　第一刷
定価　九〇〇円
発行者　川島裕
東京都千代田区西神田三丁目四番一号
発行所　株式会社光人社
電話　東京二六五　一八六四(代)
振替　東京五四六九三番
本文印刷　弘済印刷株式会社
色彩印刷　明和プロセス株式会社
製本　松栄堂製本所
〈検印廃止〉
乱丁・落丁のものは本社またはお買求めの書店でお取りかえ致します
0393-43002-2241

棟田博兵隊小説文庫 2

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

棟田博兵隊小説文庫 目次

続・分隊長の手記 5
魂伝令す 135
木口小平 165
ああ、快また快 183
今鳴るラッパは 253
解説 真鍋元之 321

続・分隊長の手記

山東だより

このまえは、たしか、
——巖々たる泰山のふもとより——
という、まことに、小気味のよい美しい書き出しでお便りをした。

地名は書けなかったので、あいもかわらず、例によって例のごとく〇〇にて、というふうに結んでおいたが、われわれが、独立警備についていたところは、界首鎮という部落なのである。

このまえにも、——ふと、小鳥の歌声を聞く朝があり、炊煙のごとき靄のたなびく夕もあり、おやッと思って気をつけてみると、心なしか、楊柳の梢にうすぼんやりと青い色がただようているようで——というふうに、山東の早春をつげておいたが、あれから、一日一日と薄紙をはぐように、ほんのりほんのりと春めきわたり、いつのまにやらぼくらは、春を迎えてしまっていたのである。

それはもちろん、内地でもそうであろうけれど、ことには、この北支の地に恵む春は、まさに恵まれるというような、ありがたい気持がするのである。ぼくらはみんな、わくわくしてしまった。長い駐屯で、われわれは、だれもかれもこぎれいになり、見違えるばかりの色男になって、毎日のらりくらりと、からだをもてあますように暮らしていたのである。そのころではもう、いくどかわれわれを襲撃してきて、しばしばわれわれに、いよいよの『覚悟』をさせ、寿命を縮まらせるような思いをさせていた山中の敗残兵どもも、遠く奥地に逃げこんでしまい、また紅槍会匪の大帰順などがあったりして、この地にきたころの物騒さは取って捨てたようになくなっていたのだった。部落民もおいおいと帰ってき、小さな治安維持会みたいなものもできたりして、しまいにはさながら、僕らはその地の警視庁のごとくおさまりこんでしまったのである。

どのような村民のいさかいも、僕らの一喝でたちまち鎮圧し、治安維持会の会長、委員、理事等の選挙にも、なにとぞご来臨をという調子で迎えられ、しまいにはわれわれになれきった臆面もない奴どもは、夫婦喧嘩のとばっちりまで持ちこんできくさるという始末である。もちろん、僕らの支那語はどだいとんちんかんで、まったくこみいった話には役にたたないものであったが、この地にたったひと

りだけ、たいそう日本語のよくわかる奴がいたので、万事はそ奴を通じてあたらしていたのである。徳という男で、事変前、済南の甥の家に働いていたと言い、こ奴はまたしやくなことには恐ろしく別嬪のかみさんを持っていた。

ミセス・界首鎮、という名前を、警視庁はこれにさずけようとしたのである。

おい徳、徳、徳、と鶏を追うような調子で、幸運宿六を呼びつけ、われわれは威儀を正して、お前んとこのおッかちゃんをミセス・界首鎮にきめたぞ、と申しわたしたのである。すると、徳亭主は、おろおろとなり、なにとぞそれはご勘弁ねがいます、ほかのことならどんなことでも言うことを聞きますからと、ペコペコと頭をさげ、手をもみはじめたのだ。

僕らは春風のようにハッハホッホと笑いころげ、こらこら勘違いするな、冥利につきた奴じゃ、ミセス・界首鎮ちゅうことは、この界首鎮で一番のベッピンシャンということだぞ、ありがたく思わんかいな。やれ、そうでしたか、それはどうもありがとうございましゅ、大人、謝々、謝々、と、いちどきにこぼれるばかりの笑みを満面にたたえて、この甘い亭主は喜んでしまった。

まったく砲声のそとにおかれ、平和な片田舎の遅々たる春日に、僕らはまったく、角もはさみもないおとなしい兵隊になってしまい、こんなことにふざけたりして日を過ごしていそのである。ときどきもたらされる状況も、いつも異状なく、遠く大汶口の南方、はるか兗州や、孔子廟の曲埠へんまで出ている第一線も、静かに布陣しているだけということであった。

ほんのり、ほんのり、と春色がこくなっていった。

僕らは、そのころは大層な家族になっていた。われわれのほかに、飯たきや風呂水くみやの苦力が三人と、ろばが二頭と、犬が三匹、鶏が十三羽、という大世帯であった。

朝も早から、ころころころころと綿入れで着ぶくれた小孩児どもが、大人、牛奶糖（キャラメル）進上、糖進上、と黄色い声や赤い声でがやがやと押しかけてくるかと思えば、きたない男や婆どもが、大人、太夫的大人、薬進上、薬進上、なぞと、やってくるのである。アスピリンと健胃錠とヨーチンと靴傷膏とで、万病をなおす名医秋山一等兵が、やおら立ち現われると、きたない患者どもは、各々その薬のきいた程度に、感謝の色をそれぞれ現わし、歓喜の声をあげる。それから、それぞれまたも、薬のきいた程度に、あるものは卵を、あるものはねぎを、といったふうに進上々々と差し出すのである。いらんといっても、なんと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いっても、持ってくるのである。

ときどきは、ろばにうちまたがって、警視総監や防疫課長や、保安課長など、春風に吹かれながら付近を遊びまわることがあるが、知ると知らざるとを問わず、小孩児どもは、わッとばかりに声をあげて、糖進上、糖進上と、歌うように言い、親爺や婆や男や女どもは、家の陰から、窓の中から、また、遠く畑の中から、手をふり、ペコンと頭を下げ、ニコニコニコニコ笑いかける。僕らは胸がふくれ、わくわくとうれしくなり、しまいには、なにかたまらぬようにさえなるのである。

この朴々たる愛すべき農民たちが、嬉々として営々とはたらき、春風の中でニコニコと笑うさまは、僕らにはこれがどうしても敵国の民衆とは思えず、かわいくてならず、またいじらしくてたまらず、どうして、お前たちは日本に生まれてこなかったのか、と、なにかしまったことをしたみたいに足ずりしたいほどはがゆく思えてくるのである。

蔣介石的中国兵的　都々的死了死了
儞們的我們的　好々的朋友朋友

と、なにやら判じものみたいな寄せ集めのことばで、われわれは、だれにでもなんべんでも、これを繰り返し、きたない綿入れの肩をたたいてやった。

この難解なる言葉はよくわからぬながらも、僕らの親愛の情は、かれらにもすぐにわかるらしく、謝々、謝々、日本兵的心テン好的と眼を輝かしてうれしがった。

「なんと、凱旋まで、わしらはここにおりたいなア、最初は、こんな田舎に警備を命じられたときにゃ、済南や泰安に行く連中がうらやましくてならなんだが、わしゃいまじゃ、ここへきたのが運がよかったと思うとる、ああ、ええとこじゃ」

と、僕らは話し合ったのである。

巌々たる泰山に白雲のかかる雄渾な風景や、突兀たる山上にのっとせり上がる月の美しさ、朝の泰山、夕の泰山、村民はまたこの泰山がなによりも自慢である。

「おい、泰山的テンホウじゃのう」

「謝々、謝々、大人」

と、いう調子なのだ。

なおも、薄紙をはぐように、ほんのりほんのりと、春になるのである。

南京のおちたというのは聞いたが、われわれには戦争はどうなっているのやら、さっぱりわからず、こんなに、のんきにいつまでも遊ばせとくところを見ると、これァひょっとするとひょっとするぞ。もう蔣介石の奴ァごねたんじ

やないかの、これァひょっとすると、――おいおい、ほんとか、嘘いうなよ、というように、いきなり回れ右、太沽へ帰れ、東へ向いとる船に乗れい、ちゅうようなことになるのとちがうか、と、そういうふうに思い出し、ちょこちょこと話し合っている間に、あるいは、とわれわれは思いこんでしまったのである。

そう思い出すと、意気地もなくわれわれは、女房や子供がむやみに恋しくなってきだして往生する。

桜も咲いただろうな、いや、桜はまだつぼみだろう、梅の満開というころだろな、わしの家にゃ大梅が三株あっての、大つぶな実がみのるんじゃ、毎年つけるがとてもつけきれんほどある。今年ゃどうするかな、大きゅうても古木じゃけん、慣れん者がのぼると、あぶないんでな。そんな話題にこり出した。

ところが、珍しくも三月にはいると、しょぼしょぼと雨の降る日がつづき、やがてはれ上がると、こんどこそは、いよいよ楊柳に、美しいみどりの芽がにょきにょきと出てきた。

いつまでも、きらきらと光りながら白々と見えていた泰山の残雪もあとかたなく消え、陸軍記念日がきて、一日二日たったころ、春風に吹かれて、もっさりとしていたわれわれの背中をどやしつけるような命令が、落雷のようにいきなりやってきたのである。

ようやく機は熟し、ふたたび、南下前進することになった。みんなが、長い間、小人数の人員でよく兵站線を確保し、その責任を充分にはたしてくれたことを中隊長は大いに喜んでいる。全員が元気な顔で、中隊長のもとにふたたび帰って来ることを楽しみに待っている。そのようなことを、トラックでほこりまみれになってやって来た特使の石田伍長がもたらした。

なんでも、徐州台児荘方面が目標らしい。とてつもない大軍が集結しとるそうだて、こんどはいよいよものすごい戦闘になるじゃろという話だ。首をよう洗うて泰安に帰ってこいや。じゃ、行くで、みやげはないか。元気者の石田伍長は、ひらりとまたもトラックに打ちのり、白い歯を出して笑いながら、黄塵といっしょに去って行った。

しばらくわれわれは、顔を見合わし、耳をひっ張られたようにきょとんとしていたのである。

すると界首駅の兵站支部長からも、同時に命令が出た。神尾軍曹と種々打ち合わせをやり、やっと僕らの行動が決定したのは三月十二日であった。

僕らは、この地を、三月十三日に出発することにきまっ

た。それは兵站監下にある輸送部隊を護衛して、ひとまず済南まで北上し、済南から汽車に乗って、中隊の集結地である泰安に、十六日中に集結し終わるということになったのである。

さあ、いそがしいぞ、いそがしいぞ、と僕らは騒ぎたてた。だれも、ついけさまで、いっしょうけんめいに話していたようなのんきな話は、いったいだれが話したのかなというふうに、まるでおくびにも出さず、急にちがった顔になって、ただ、さア、快々的、快々的、いそがしいぞ、いそがしいぞと、そんなことばかりを叫び合っていた。

＊

十三日は曇った朝であった。

示された時刻に、部落はずれの集合地点にゆき、あッとばかりに僕らはたまげてしまった。三百輛の車輛部隊であるということは前日に聞いていたが、われわれはてっきり特務兵がひいているのであろうと思っていたのに、これはなんと、ことごとくが支那人苦力ばかりなのだ。さまざまな服装をしたやつが三百人あまりも、わやわやがやがや、かまびすしく叫びあっているのである。なかにカーキ色の日本兵は、ぽつんぽつんと、数えるほどしかいない。それらはみな、支那馬に高い鞍をつけて乗り、長い鞭と笛とを持って、混み合っている車輛の間を縫いながら、苦力を整理し、行進序列を区分しているのである。早くも、もやもやもくもくとほこりが舞い上がり始めている。

僕らのそばへ、日本馬を飛ばしてやってきた中尉が、棟田分隊ですか、わたしが谷波中尉です、とていねいに言った。分隊員に不動の姿勢をとらせ、捧げ銃をして、分隊長以下十名、と僕は報告した。この人が僅少〇〇名の部下を率いて、このものすさまじい多くの支那人苦力を統御し、この兵站線に活躍していた谷波隊の隊長であるにしては、色も白いし、少し男前すぎるような気がした。

車輛と馬で、行軍隊形はうんと伸び、およそ一里くらいになるということである。われわれの序列はどうなっとりますか、と聞くと、先頭と後尾についてもらいたいのだという。承知しました、と答え、伊賀上等兵に半数をつけて先頭にやらせ、残余を僕がひきいて最後尾につくことにきめる。

苦力どもは、がやがやわいわいと喋べり合い、あっちにゆき、こっちにゆき、車輛をひっかけ合ってはなにか怒鳴り、馬をどやしつけ、また追い立て、らちもなく混乱するばかりなので、監視隊の苦労もひとおりではない。なか

に、数名、これもやはり苦力と同じようなかっこうだが、支那馬に乗って、車輛の渦巻きのなかをかけ回り、いかにも颯爽たる奴がいるのは、みな腕に白帯を巻き、三班馬夫頭とか、一班馬夫頭とか書いてある。苦力どもの親分であろう。しなしなした鞭をもって、キンキン声でなにかしら怒鳴りつけては、苦力どもに鞭をふるっている。

午前六時三十分の出発といっていたのが、七時になったというのに、苦力どもは、まだ区分がうまくゆかず、騒ぎまわっていたが、やがて、しだいに先頭から順次、街道に前進を起こし、それでも、どうやらこうやら順次に動いてゆき出した。

もうもうたる泰安街道名題の黄塵が早くもまき上がりだし、みるみる僕らは頭からまっ白にほこりをかむってしまった。われわれが前進を始めると、後ろから突如として、

「大人。再見」

「大人。再見」

と、黄色い声や青い声や、太い声や細い声などが、一どきに叫びだされ、はッとしてほこりの中でふりかえると、ほこりの煙幕の向こうで、ごちゃごちゃと、ぼけた人影が、ひらひらひらひらと手をふっているのが見える。

「おう、再見。再見」

と、僕らも銃をふり上げ、負けずに大声でそれにこたえた。すーっと一陣の風のように、淋しげな愛情が胸を横切るのを僕はおぼえた。愛すべきこの地の朴々たるあの支那人たちも、またそれに答えた僕たちも、「再見。再見」と互いに投げ合ったが、僕らはむろんのこと、かれらにふたたび会う日のあろうとは露も思わず、かれらにしても、おそらくわれわれがふたたびこの地にこようとは思わぬにちがいあるまい。けれども、なおも、かすんでくるぼくらの影に、かれらはいつまでもいつまでも、再見、再見を浴びせかけ、またわれわれも、なにか躍起のごとくに、再見、再見とそれに答えるのであった。

もうもうと、もうもうと、黄塵はしだいに、さかんにまきあがり、舞い立ち、われわれを包みこんでゆきだした。

まさに、えんえんたる長蛇の行進である。うねうねと山にそい、畑を横切り、坂を降り、坂を登り、もうもうと黄塵をわきたたせて、どこまでもどこまでも、えんえんとうちつづく人馬と車輛。その中を、前に後ろに、馬を飛ばせてかけ抜け、かけもどる兵隊。おびただしい苦力のふりまわす長い鞭が、一瞬、描く弧、舌を鳴らして気合を入れる怒声罵声。それらを包みこみ、生きもののように、絶えずもうもうもくもくと黄塵は休みなく、舞いたち、わき上が

ってゆくのだ。

僕らは黒い寒冷紗でこしらえた防塵眼帯を眼におおい、口と鼻を手拭でしばりつけながら歩いているのであるが、いくらも歩かぬうちに、早くも僕らは疲れてきだした。

「なんと、こたえるなあ」

「辛苦多々的じゃ。まア、さきに済南という楽しみがあるんで辛抱もできるがな。さもなくば、とてもものことにゃ、ついて行けんで」

「おおきにな。まア二日の辛抱じゃ。三日目にゃ済南じゃもんな、ようなっとるじゃろな済南は。ネオンサインがともっとるという話だぞ」

「ネオンサインどころか、日本の芸者や女給も多々的きとるということだ。赤い灯青い灯でなあ、日本の女に酌をしてもろうて、たらふく飲んで食やあ、もう思い残すことァないちゅうもんじゃ。わしゃ張り切るぞ」

「わしも張り切る。——しかし、どうも、これァこたえるなあ。肩はそうでもないが、足がな、わしゃもう豆ができかけたようだ」

「なにせ、一と月半近くも、のらくらと足を遊ばしとったからの」

僕らの足もむろん弱っているにはいたが、馬と車輛のみで一里以上も伸びたこの行軍隊形では、途中ではげしく伸び縮みがおこり、最後尾では絶えず、歩度が伸び、また縮むのである。

これは行軍にとって一番苦手だ。これくらい、疲労を早くさせるものはない。そのうえ、徒歩部隊とちがって、道路さえ良ければ、歩度は早いのである。六キロで進んでいると思うと、急に八キロになり、不意にまた停まったりする。それに、波のごとく濃霧のごとき黄塵が、眼も口も開けられぬほど、どこまでも押し包んでいるのだ。小休止も非常に少ない。

僕らは、まったくのところ、アゴを出してしまった。僕らは弱っているせいで、あまり付近の風景を見るゆとりはなかったけれど、山東の春はいまや、たけなわならんとして、樹々は、いち早く色づき、小川にも氷が見えず、せんかんと水はささやき、どこかでチイクチイクと小鳥のさえずりが聞こえているのである。しかし、僕らは、それどころではなかった。

万一を考慮して、囲壁のある部落に露営することになり、行程を、少しのばして、その夜は作米店まで、遅くなっても行くことになった。ほとんど十里に近いので、これはいよいよ辛苦多々的であるのだが、作米店まできょうのうち

に行っておけば、翌日は夕方には済南にはいれるということなので、それもええ、骨折りはついでにかたづけとけということもあるからの、出しついでにもう少しアゴを出せばいいわけじゃ。済南思えば心もおどるじゃ。そのこと、そのこと。

よっこらしょ、と背嚢をゆすり上げ、またも下ばかり向いて、後盒の上に握りこぶしを乗っけたり、負革の中に指を入れたり、さまざまに苦心しながら、まだだいぶ歩かにゃならんのだぞ、と足に言い聞かせ、黄塵の波の中をもぐるようにして歩きつづけるのである。

*

その作米店の長い夜は雨に明けた。

「昨日からどうも、あやしい模様だったがな」

「まア、ほこりが立たんのがありがたいわい」

「ほこりは立たんが、その代わり、また道が味噌みたいになるかと思うとな。どっちにしても、ろくなこたアないわい」

「両方ええのは頬かむりだけか。まア、春雨じゃで、ぬれて行こうて」

右手に珍しくも、杉の木が少しある山が一つだけある。あとは左手も前も後ろも岩山ばかりである。その山々が炊煙のごとき雨のかなたにぼう——とかすんで、それはちょっと絵のように、ええ景色に見える。

土間の焚火に、車座になって朝飯をたべていると、騎兵の襟章をつけた谷波隊の若い少尉がやってきて、大きな声で、

「やあ、昨夜はご苦労さん。きょうはもう、そうとう安心してもいい地域の行軍ですから、それに路もかなりぬかるむでしょうから、みんな適当に車輛に乗ってください。あなたとあなたには馬をお貸しします」

と、伊賀とぼくとへ顔を向けた。

「やあ、どうも、それはありがたいです。いまもみんなで話してたところですが、そうさせていただくと大助かりです。なにぶんよろしく願います。しかし、きょうは何時ごろに済南にはいれるでしょうな」

「夕方、暗くならないうちという予定ですが、道路の状況ではどうなりますか」

雨は、絹糸みたいに細い雨で、やむ気色もなく、静かに降りつづけた。

午前七時きっかりに出発する。

黒い支那馬に伊賀が乗り、僕は白い馬に乗る。トコトコ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com